

「言葉を唄う伝える仕事に命がけです」 李 広宏インタビュー

ききて 西館好子

雰囲気はソフトなのに佇まいが凛としている。真つ直ぐに伸びた姿勢の良さと、実に優しい日本語を話す。旅先まで追っかけと称するファンが多いのも納得。

生まれは中国蘇州。生まれたとき中国は文化大革命の真っ最中、物心つく頃から自分の国は「行進曲」だけの国だと思っていたという。

家は父親が胡弓奏者、姉はソプラノ歌手、芸術的な一家だった。11才で日本の唄「夏の思い出」をきき、いたく感動したのが後の日本留学へと繋がる。

16才で中国伝統劇団「沪劇」の俳優にスカウトされ、10年間俳優業をする。

.....

CDのジャケットの中に当時の写真があり、きりりとした舞台写真を見せていただいた。

「それがなぜ日本に来ることになったのですか？」

「あの夏の思い出のきれいな曲がある国に行ってみたく、この目で確かめたいとずっと思っていました。それに」

：プロの俳優ですが、自分の唄が日本で通用するかためしたい。

ちよつと、そんな気もありませんね。」

「でも、言葉も知らないのですか？」

「でもわたし、日本語習っていました。片言



には少し。びっくりしたのは留学生として正式に認められて日本にこられたことです。

恐怖の文革は1976年まで続き、開放政策が始まった。1987年、留学生の公募に応募し合格しました。嬉しかったですね。5000円とトランク一つ下げて日本に来ました。」

「5000円？そんな無謀な。」

「はい、つまり食べられません。」

「そうよね。野宿でもしたのですか？」

「いいえ、四畳半のアパートにいて、皿洗いのバイトしました。」

「それ、清貧の書よ。」

「精神は明るかったです。なぜならばそこで好子さんみたいなおばさんにあつたからです。」

「つまりお節介な人ということ？」

「皿洗いは朝と晩ご飯が付いていました。」

「それで生きられたのね。」

「はい、でも若いからお腹すきました。昼はみんなと食事できませんから、そつと抜け出して、空など観ていました。そのことをみていた掃除婦のおばさんが」

「その姿をみてでしょうね。」

「次の日からお弁当を造つてきてくれました。凄く素っ気なく『李ーくんこれ食べなさい』って僕の前にすつとお弁当箱を滑らせてくれるわけです。かわいいひとでした。」

「そこもわたしと似ていたのかしら。」

「まあ、毎日作つてもつてきてくれました。」

「趣味だったんですよ、きつと。」

「そのうちに音楽がやりたいと話したら、早速カセットテープに日本の歌をいれてもつて来てくれました。日本の心にふれましたね、終電で帰ると音楽を聴いて寝ました。慰められました。」

「失礼ですが、テープレコーダーはあつたのですか？」

「なんとか：それに8ヶ月で外国人歌謡大賞に入賞しましたし、それに紅白歌合戦に。」

「ええ、そんなに急成長、出世？」

「テレビ東京の外国人紅白歌合戦です、次にはNHKのど自慢で優勝しました。」

李さんと話していると何だか日本人としての自信が揺らいでくる。言葉が理路整然としているのだ。おばさんは優しく李さんの日常から消えていった。

それから語学学校をやり、結婚し、自主出版で「にほんの心の唄」を制作する。

苦労は何のそのと言った様に聞こえるが、並では無かつたのは全部唄の豊かさになっていったようだ。

「日本のうた。お父さんお母さんを愛するところから出発しています。日本人のやさしいところ、唄に言葉に力がある。詩はきれい。言葉を唄う伝える仕事に命がけです。」

そう言う李さんは阪神大震災の犠牲者、家は崩壊、三歳の息子を抱えてにげまかつた経験を持つ。【震災は他人ごとではない】

唄つたお金を貯めて、ハイチの地震の地に小学校を寄付したり、中国の大地震ではチャリティコンサートを開いて応援をし続けている。



李 広宏

1961年02月16日 -
中国出身の歌手、翻訳家、作詞家、
中国蘇州生まれ。
日本の歌の中国語訳を数多く手がけており、
その訳詞は多くのテレビ・ラジオの中国語講座番組や
語学雑誌の教材として採用されている。

李さんと会つてみると心がスッパリする。日本語ってこんなにきれいだったと再認識する。
下町育ちの私は爪の垢でも煎じて飲まなくてはいけないと自戒している。
又、子守唄協会でご出演をお願いすることにしています。ご期待下さい。

.....